週刊「考歴民（これみ）」Ｎｏ24　2021.9.6.

交野古文化同好会

考古・歴史・民俗の頭文字を取って考歴民（これみ）と名付けました。

=土地に刻まれた歴史=

「誰が、地名の大部分は

名もない庶民によってつくられた」

地名の由来から　武光　誠著

郡津（こうづ）Ⅱ

山崎

郡津西ノ町（郡津５丁目）村野へ行く道がある。西ノ町の集落が乗っている台地の西端部分（丸山古墳?より西の部分）である。

山崎の地が重要なのは天野川を挟んで西の枚方丘陵と対していることである。

天野川で東の台地と西の丘陵とが一番狭まった地域であることから、戦略上、天野川筋の豊かな土地を守る意味で重要であった。そのようなことから交野豪族や郡司は、大いなる塚を造ったのが丸山古墳であり、大塚であり、梅塚であった。

一方、藤田山にも古墳が相次いで築造されている。両者が互いに天野川を挟んで向かい合っている感じである。

もう一つ、推定で言われているのがある。

壬申の乱（６７２）が天智天皇の皇子、大友皇子（後、弘文天皇）と天智天皇の弟、大海人皇子（後の天武天皇）との間に起こった皇位継承争いであるが、大友皇子は武運尽きて敗れ、近江から敗走、山前の地で自決したとある。

この山前の地というのが古来三ヶ所あって、大津市の山前、京都大山崎、当市、山崎であることから大友皇子の陵墓?ではないか?と手を挙げたのではないか?

山崎橋から丸山古墳

二ノ宮（にのみや）

東高野街道の茶屋町より西、天野川の近くまで東西に長い地域である。

二ノ宮というのは、昔、郡津神社は三社に分かれていたところから付けられた。

現在の郡津神社が一ノ宮で祭神は素戔嗚尊（すさのおのみこと）、二ノ宮は今の郡津３丁目の所にあって祭神は住吉明神であり、三ノ宮は大塚の所の郡津５丁目の辺りにあった。

この三つの社が明治６年３月、神社統合によって二ノ宮、三ノ宮が一ノ宮に合祀され、名前も郡津神社となった。

高野街道付近に二宮?

参考・神社の名称

例えば春日大社の場合、一宮・二宮・三宮・四宮といった言い方をするし、伏見稲荷の上社・中社・下社、または平野神社の一殿・二殿・三殿・四殿、といったような表現が好んで用いられている。

伊勢神宮の場合でも、祭神の名をいうより先に、我々は内宮・外宮の呼称をもってすませてしまっている。

天照大神（内宮）や豊受大神（外宮）の存在を知らないわけではないが、かといって我々は、それらの主要な祭神がどのような性格をもつ神であるのかを、よく理解していない。

また知らなくとも、それで事が足りている。

「神と仏」山折哲雄

西代（にしんだい）

西代の「代」は「しろ」である。

「しろ」は材料、代用品、代金といった意味で標（しるし）からきており「しり」、「しろ」となまっていく。

田畑のときの「しろ」は敷広（しきひろ）のことで、これは広さを表わしている。

古代、田畑の面積の単位として用いられていた。

字は「頃」を当てている。

１代（しろ）は稲１束分の土地で約２２．８㎡の面積である。

大化改新以後、班田収授法が施行され、班田農民に対して口分田を支給していくが、その場合の土地の面積の単位は「町、段、分」で表わすようになると、以前の「頃」は消えていく。

１頃は５歩であった。

１歩は約１．８m四方で、今の約１坪の面積である。天野川筋が私市から枚方市禁野まで条里制が施行されたように、古くから米作地帯で豊潤な土地であった。

郡津はこの条里のちょうど中央部の五条通りに当たる。

西代はこの五条から六条にかけてであるので、天野川筋の中心地として条里制以前から米作地として最適地であったことを意味しているようだ。

参考・公地公民制の崩壊

・大化改新の詔（６４６年）→公地公民制…すべての土地は国のもの。

・大宝律令（７０１年）→班田収授法…６歳以上に田を貸し、税をとる。

・三世一身法（７２３年）→期限付土地私有…開墾地を一定期間所有できる。

・墾田永年私財法（７４３年）→無期限土地私有開墾した土地は本人のもの。

西久保（にしのくぼ）

東高野街道を挟んで西が西代、東が西久保である。

下茶屋から東、明遍寺から倉山にかけての台地、郡津神社までを指している。

久保というのは「くぼ地」のことで、水たまり、水のよく湧く所といった意味から、水に恵まれた水田地帯を指してよくつかわれる言葉である。

しかし、郡津の場合はそれとは異なる。

西代が天野川の氾濫原で水の便が良い。

西久保はそれより一段高い低位段丘面のような地形から、倉山町の乗っているのはそれよりなお５ｍほど高い台地である。

倉山の台地はため池が非常に多かった。

一方明遍寺下の西久保は井戸が非常に多い。

２００ｍ四方の台地（倉山の水田地帯）だけで１０ヶ所のため池がある。

一段下の台地には田一筆ごとに一つの井戸があるぐらいである。

この井戸もさして深くなく、水をくみ上げてもすぐに井戸水はいっぱいになるということで、地下水位が高いうえに地下水が豊富であることを示している。

はねつるべ棒が立っていて、毎朝お百姓さんが井戸水をくみ上げていたのである。

しかも、西久保はほとんど一等田であるということである。

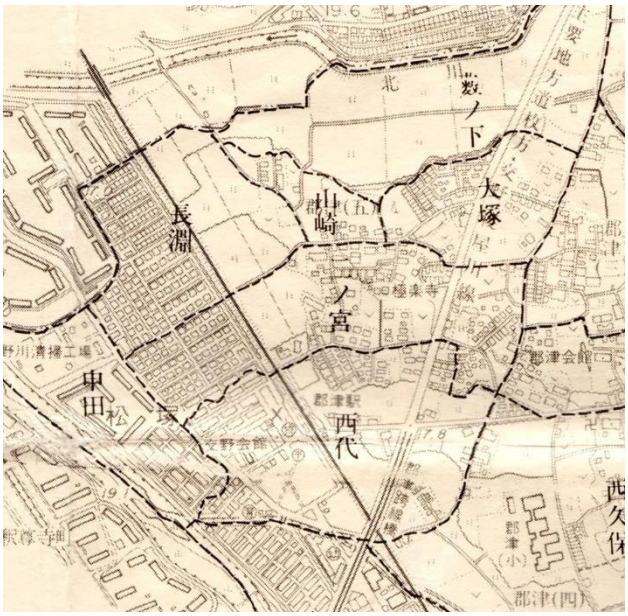
もう一つ、久保の意味として、久保田、公文田ではなかったかというのである。
公文田というのは国衙の役人や荘園の役人に給せられた田を指す。
というのは郡津の倉山は交野郡の郡衙（ぐんが）があった所である。
貢租米がこの郡衙に集められたのであるから、たくさんの米蔵が建ち並んでいた。
郡衙に務める役人も相当数いたと思われる。
偉い役人にはそれ相当の田畑が与えられた。
西久保は天野川筋の条里から外れていた雑地であったのであろう。
それを開かせるために与えられ、開墾された土地が公文田であった。
この公文田でいつのころからか「公文」が「久保」になり、郡津神社の西にあたる久保で、西久保となったのではないだろうか。

梅が枝・河原（かわら）

現在、梅が枝になっている部分である。
免除川から南、天野川までの低地である。
この地はもと天野川の氾濫原であることと、免除川が天野川に近づいているため、大雨の時は非常に排水が悪い。
そのため私部からの水をほとんどここで抱くため、いつも冠水する。
京阪電車の線路も冠水しかねないときがある。
松塚の地とともに水田は埋め立てられ、住宅地に変わってしまった。
そして府水道の上が道路となって交野線を越す跨線橋となったことから、古代条里機構として残っていた五条通りが消えてしまったことが非常に残念である。
また、五条通りが天野川堤防への上り口に「東高野街道」と書かれた立派な石碑が立っていたのであるが、道路工事の時になくなってしまったのが非常に惜しいことであった。
古文化同好会で再建立がのぞまれる、検討要。

申田（さるた）

松塚の町名になっている所の小字名は、申田と長淵である。
申田は、免除川が現在は交野幼稚園（現・駐車場?）の裏から直接天野川に流入しているが、昔はここから再び東へ大きく湾曲し、北へ折れて今の村野のぎんが保育園の辺りで北川と合流して天野川に流入していた。この川を申田川と呼んでいた。



この間に挟まれた地域が申田であった。
この申田川より東が二ノ宮、長淵である。
長淵の方が申田より土地は低く、湿地であった。
申田の方がいくぶん高かった。
干支の申方位（南西）ではない。
郡津からは北西の方角になる。
現地に行って確かめてみたら。
意味としては「さらだ（新田）」かと思われる。

申田川、天野川に挟まれた低地で、氾濫によってよく流されたり、埋まったりした田地であるから、新しい排水路を造ってできた新田であろうと思われる。新品の物を「さら」といいませんか?
私は新田(しんでん)を、さらたと呼び、さらた、さらたがさるたに変換したのではないかなぁ。

過去の記録から

・宝暦６（1756）９月 16 日大雨洪水で村々の川堤切れ、田地砂入多くできる
・明和６（1769）大雨あり、洪水のため川々堤切れ砂入多し(加地章所蔵文書)
・明治元（1868）大雨あり天野川堤郡津の西で決潰、当時砂入田の砂を集め現在の砂丘を成す

この時の決潰が「さらた」がつくったのでは

長淵（ながぶち）

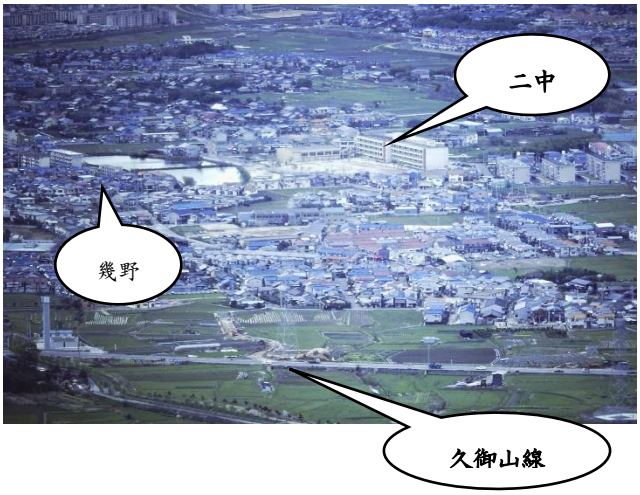
申田川より東で山崎までの郡津では一番低い土地である。
現在は京阪電車から東だけ残っている。
免除川、村野との境界を流れる北川とが合流する手前であるのと、天野川の水を最後にため込むのでいつまでも水が引かない。
そのようなことから放水池の役目をなしていた。
埋め立てられる前は電車沿いに長い池、水路が広がっていた。

山崎橋から郡津駅東側

幾野（いくの）

幾野１丁目～６丁目は郡津の生野、倉治と私部の幾野、倉治の井尻、北代が含まれている。
同じ「いくの」でも字が異なるのはどうしてかよく分からないが、意味は「いかの」（茂野）のことで、草木のよく茂った原野であったろうということであるらしい。
郡津、倉治、私部の３集落からのちょうど真ん中に当たるのと、土地が高いために水の便が悪い。
よって、長く原野のまま放置され、放牧地として利用されていた程度であった。
その後、開墾されたが多くは畑であった。
大豆、さつまいも、麦、竹藪、茶畑等が点在していた。
近年、郡津の生野が開発されて住宅地となり、今池（三つ池）の北の池が昭和４７年に交野第二中学校として生まれ変わった。
その後、倉治と私部の幾野も次々と住宅地になり、水田、畑はごくわずかしか残っていない。
右側の二つの池も埋め立てが終わっている。

今回の埋めたてで、すべて３ヶ所の池が壊された
市内の池も壊されていきます。
いつかまた、いつか、明日か、何十年先自然災害がおこるとも、おきないとも。



番　外　編

かつきゆる

うき身のあわと成りぬとも

誰かは問はん　跡の白波

『風葉集』巻 14・恋４

美男子で評判の交野の少将が、鷹狩をしたときに交野郡司の館に泊まると、その郡司の娘が交野の少将に一目ぼれしてしまいます。

しかし、恋多き男である少将が郡司の館を再び訪れることはなく、ただ月日が過ぎていくことに絶望した娘は長淵へ身投げを決意します。

娘は自分の着物の端を引きちぎり、淵のそばを通りかかった鵜飼の男が 灯していたかがり火の墨で着物の端に辞世の歌を書きつけ、それを少将に渡すように鵜飼の男に言い残して長淵に身を投げました。

歌碑・松塚ふれあい館前

茶屋の清水

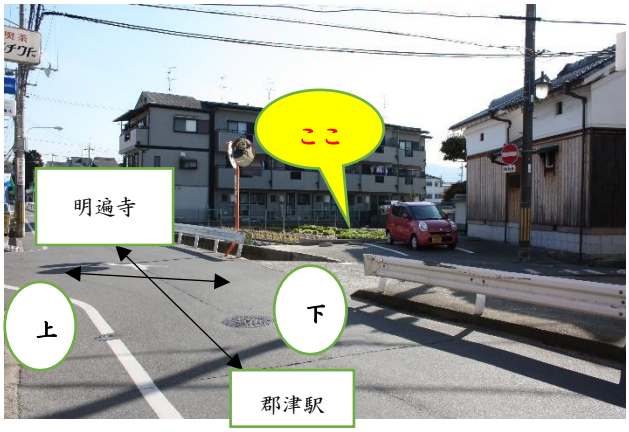
昔、ある日のこと、茶屋に見すぼらしい旅の僧が来て水を一杯ほしいとお願いしたが、誰も水をすすめる者がなかった。

ところが上茶屋で水を汲んで差し出す人がいた。その僧は弘法大師で、そのお礼に大師は新たに清水の湧き出る場所を教えたという。

森本順子氏画

蚊封じの池・浮きん田

上茶屋から北～南に下ると、郡津駅に通じる道（東西）の道と交差する東側が蚊封じの池だという。昔、弘法大師がここでお休みになった時「蚊が地面から三尺のところまで来るな」とお祈りされた。以来ここには蚊が来なくなったという。



蚊封じの池

交差するところを「浮きん田」である。

「浮きん田」とは大雨になれば谷筋の水が出て冠水した。せっかく植えた苗が浮いてしまうことから出来た地名。

二棟の蔵は（故）元会長・中光司宅で「ふるさとかたの地名をたずねて」編集に大変ご苦労いただきました。

昔の地名がこうして語り続けられることに感謝いたします。

追記:壬申の乱

はじめ大海人皇子の妃だった額田王が、のち天智天皇の妃となり、なお彼女が大海人皇子に心を寄せていたことからくる三角関係のもつれが原因であるとよくいわれるが

（隣）誰がそんなデマを、でもありえるなぁ

（考）ことはそんな単純なものではない

天智天皇は、自分の子大友皇子に皇位を譲ろうとしていた。

しかし、大友皇子の母は采女（うねめ）であり、血統からいえば、当時の慣習としても、天智天皇の弟、大海人皇子の方が後継者とみられていた。

（隣）ごめん、采女ってなに

（考）朝廷において、天皇や皇后に近侍（きんじ）し、食事など身のまわりのことを専門に行う、女官のこと

天智天皇が臨終の時、大海人皇子は天皇側の暗殺を恐れて頭を剃って吉野に入った。

天智 10（671）12 月没、後継者に大友皇子が即位して弘文天皇となった

（隣）どこに書いてんねん

（考）日本書記には即位の記事はなく、明治政府によって在位が認められて弘文天皇と追諡（ついし）されたのは明治３年（1870）のことである

（隣）追諡てなんや、赤点とったからか

（考）それはあんたや、追諡とは死後に贈り名を贈ること

（隣）諡号（しごう）とおなじや、俺の贈り名を考えといて

（考）そうや、よく知ってますなぁ、空海の贈り名は弘法大師さんや

翌年６月、大海人皇子は行動をおこし、吉野を出発して伊賀を通って伊勢に出た。

尾張・美濃などの国の人々が味方に加わり、弘文天皇方と戦いになった。

ついに７月 22 日、近江の瀬田川のほとりで決戦がくりひろげられ、翌日、大津京は陥落し、弘文天皇は山中で自害している。

この壬申の乱で勝利を収めた大海人皇子は９月、都を飛鳥にもどし、新しい宮を造営した。

これが飛鳥浄御原宮である。

了

久しぶりに（考）考歴民のオッサンと（隣）隣のなんでやオジサンに参加していただきました。

参考資料=わがまちふるさとかたの地名をたずねて=

交野市史（民俗編）　写真・古文化資料室